

Der Engel vom Westlichen Fenster:
G. M. 1911



紀田順一郎 荒俣宏
—— 責任編集

世界幻想文学大系 ③⑧
B

世界幻想文学大系……責任編集Ⅱ紀田順一郎＋荒俣宏
第三十八巻B

西の窓の天使——下

昭和六〇年八月五日印刷 昭和六〇年八月一〇日初版第一刷発行

著者——グスタフ・マイリンク

訳者——佐藤恵三＋竹内節

発行者——佐藤今朝夫

発行所——株式会社国書刊行会

東京都豊島区巣鴨三―五―一八 郵便番号一七〇 電話〇三―九一七―八二八七 振替東京五一六五二〇九

造本者——杉浦康平＋鈴木一誌 協力Ⅱ佐藤篤司

挿画——渡辺富士雄

印刷所——凸版印刷株式会社＋セイユウ写真印刷株式会社

製本所——凸版印刷株式会社

定価——三、〇〇〇円

●——落丁本・乱丁本はおとりかえします

佐藤恵三さんとうけいぞう

一九三五年、弘前市生れ。

京都大学大学院修士課程修了。

現在、京都産業大学教授。

専攻、ドイツ文学。

主要訳書——

エーヴェルス『蜘蛛・ミイラの花嫁他』

(共訳)創土社、一九七三年。

マイリンク『緑の顔』

創土社、一九七四年。

エーヴェルス『魔法使いの弟子』

創土社、一九七九年。

竹内節たけうちみさお

一九四七年、長野県生れ。

大阪市立大学大学院修士課程修了。

現在、姫路工業大学助教授。

専攻、ドイツ文学。

主要訳書——

トーマス・ベルンハルト『石灰工場』

早川書房、一九八一年。

世界幻想文学大系——第三十八卷B

西の窓の天使——下 G・マイリンク——佐藤恵三十竹内節二訳



目次

— 西の窓の天使 — 下

303 — 解説……佐藤恵三

30 — グスタフ・マイリンク年譜

34 — プラハ略図・フラチャニ城略図

西の窓の天使——下

初めての幻視

私に起こったいろいろの出来事や局面の変化が胸を圧倒するばかりで、ひとつひとつたどるように字句に写しとめることは、もはやなかなかできそうにない。

静かな夜の時間を利用して、起こったことを細大漏らさず紙に書きとめておこう。

私はヨハンナを——それともジェーンと書くべきかな？——寝かしつけてしまうと、仕事部屋に戻り、リポーターティンとのやりとりを書きとめて、今では習慣になっている記録をまずは仕あげた。

それからジョン・ディーの「神聖かつ靈驗あらたかなる石」を手にとり、もの思いに耽りながら、台座とそこに彫りこまれている銘を調べてみた。私の目差しは次第にその黄金装飾からそれ、つるつるした滑らかな瀝青炭の面そのものに釘づけになり、時のたつのも忘れるばかりだった。

そうしているときのことだ。あのときと同じようなことが起こった——今では、どうもそんな気がしてならない——リポーターティンがくれたフィレンツェ製の鏡を覗きこんでいるうちに、知らず知らず、駅で友人のゲルトナーを待っている幻影を見た、あのときとそっくりなのだ。

しばらくすると、黒光りする石炭の結晶面から目を離すことができなくなってしまった。やがて私はあのと
きと同じような現象を見たのだ、いや、見たというより、それに絡みとられていた、と言ったほうがいいか

もしれない。——深緑色にうねる背景から、疾風の如くこちらに向かつて駆けて来る灰色の馬の群れの真つただ中にいた。最初私は思った。——いずれにせよ、異様などころなど微塵もなく、はっきり見分けのつくものだ、ああ、これがヨハンナの言っていた緑の海だな！と。——だが、もうしばらく瞳を凝らしていると、細かいことがもつとはっきり見てとれ、森や、風通しのよい夜の広い畑を荒々しいヴォータン・1の軍勢の如く疾過しているのは、裸馬の群れだと気づいた。それと同時にのみこめたのは、こういうことだった。その馬の一群は、実は褥で眠りこんでいる何百万もの人間の魂なのであり、寝ている間に統率者からも乗り手からもはぐれてしまって、どこにあるかもわからぬ故郷——いや、見失ってしまったからには、もはや見つけることもできまいと予感している遠い未知の故郷を、鬱勃とした本能につき動かされて捜しまわっているのだ、と。

私自身は、雪のように白い馬に跨る騎士だった。この白馬は、ほかの灰色の馬と較べれば、いわば現実性を帯び肉体を具えたものと言えた。

鼻息も荒々しく、狂暴奔放な野生の馬たちは——荒海に逆巻く水泡みなわのようだった——すぐさま、眼下に蜿蜒と延びている森の山脈やまなみを横切って行つた。幾重にも曲がりくねって流れる川が、細い銀の帯となつて遠くにちらちらしていた。——

見まわせば至るところ、低い山脈で囲まれた広い盆地が開けている。疾駆する馬の群れは、流れに向かつて

・1—ヴォーダンともいい、ゲルマン神話の軍神。北欧神話における父神オーディンと同一視される。
死の軍団の指揮者で、ワルハラワルハラの天堂に勇士の御霊を招集するという。

進む。遠くのほうには町が上へ上へと伸びている。私のまわりを駈けて行く馬の群れの輪郭は、まるで灰色の靄に溶けこんでいくかのようだ。——やがて私は、にわかに射し出した八月の朝日を浴びて、大きくアーチを描く石橋を渡っている。橋の欄干には聖者や王たちの高い彫像が立っている。目の前の川岸に、古びた粗末な家々がごじゃごじゃひしめきあっており、屹立する二、三のきらびやかな宮殿に気圧され、わきへと押しやられていくようだ。だが、この誇らしげにそそり立つ建物さえ、木の生い茂る丘に高々とそびえる城壁の圧倒的な稜線の力強さに、打ちひしがれたままだ。塔や屋根、銃眼のついた渡櫓、それに円屋根の望楼などで空中を薄黒く刻む城壁だ。「フラチャニ城だ!」——と私の身内に叫ぶ声がある。

それじゃ、私がいるのはブラハか?!——ブラハにいたのは誰だ?——私は果たして何者なんだろう。

——私の周囲でなにが起こっているんだろう。——上手に馬を乗りこなし、私のようにモルダウ(ウルタウ)川の石橋を渡っている市民や農民たちの注意を惹かずに、聖ネボムク¹の立像のそばを通り過ぎ、クラインザイテ²へ向かう自分の姿が目映る。私は、ベルヴェデーレ宮でハーブスブルク家の総帥、ルードルフ皇帝に謁見するよう命じられていたのだ、と思い知る。私の傍らにはもうひとり、クリーム色の雌馬に跨った従者がいる。朝は抜けるような蒼さで、太陽がじりじり照りつけ始めたというのに、少しすり切れただけの豪華な毛皮のマントを着こんでいる。この毛皮のマントは衣装棚からひっぱり出した一張羅らしく、陛下の御前でなんとか立派に見せようと着ていたのだ。「浮浪者の男伊達だ!——と、ふと私の心に浮かぶ。こちのほうで流行遅れの服を着ているのに、少しも変だとは思わない。ほかにどうしようがあるう!——やはり聖ラウレンティウスの日のことを書いておこう。われわれが一五八四年などと言っている年の八月十日のことだ!——過去に乗りこんだわけだな、と私はひとり言を言う。こうなつたとしても、別に不思議だとも思

わない。

嵐のような目、ひっこんだ額、しゃくれた顎をしたこの男は、エドワード・ケリーだ。成りあがりでお大尽気どりの田舎男爵や大公たちが、参内の際によくやるように、旅籠の「最後の灯火館」に泊まることは、やつのことで思いとどまらせた。——ふたりで使うことにしていた財布の紐を握っているのはケリーで、まさに歳の市に群がる見物人相手の大道医者よろしく、見栄をきるのは再三のことだ！　そうかと思うと、再三にわたって財布を一杯にしてのける。そのやり方もまた恥も外聞もないときている。私のような人間なら、そんなことをするぐらいだったら手を切り落として、ここぞと思うところが見つかり次第ごろんと横になり、ままよとばかり野垂れ死にしたほうがましだと思う。私は今はジョン・ディーで、自分自身の祖先になっているのだ、とようやく思い知った。さもなければ、故郷のモートレイクから逃亡して以来、私たちに起こったことがこれほどありありと浮かんてこようか！——私たちの乗ったぼろ帆船が嵐にもまれて海峡に浮かんでいるのを見、このまま死ぬのではないかと怯える妻ジェーンの気持を、私は今も感じている。ジェーンは、恐怖に打ちひしがれて私にすがりつき、涙声にこう言う。「ジョン、あなたとなら死んでもいいわ。あなたと一緒に。ああ、なんて嬉しいんでしょ！　どうせ溺れ死ぬんでも、ひとりなんていや——二度と帰っ

・1ーヤン・ネボムク(一三五〇頃—九三〇)。一三八九年にブラハの司教総代理となる。

当時の王ヴエンツェル四世の命により袋詰めになれ、モルダウ川で溺死させられた。

王女ソフィーの懺悔の中身を洩らすのを拒絶したから、という。

カレル橋は欄干に二十数箇の聖人像を並べているので有名だが、その一つにこの人物が入る。

・2ーブラハの市域は旧市街と新市街とこの名の区域とに大きくわけられる。
フラチャニ城もこの地区にある。

てこれない緑の深海の藻屑になんかさせないで！」——それからオランダをめぐった惨めな旅。乏しい旅費をきりつめるため、いかかわしい木賃宿での骨休めと夜露しのぎ。空きっ腹と凍え死ぬほどの寒さ。妻子の手をひき、どんな辻々もわがもの顔のはったり屋を連れ、尾羽打ち枯らしての流浪。だが、この男が市の立つところを見つけてはやらかすいんちきがなければ、一五八三年の雪降りしきる厳しい初冬の、あのドイツの低地を通り抜けることなど、私には決してできなかっただろう。

やがて私たちは酷寒のなかをポーランドへと足をのぼした。ワルシャワでケリーは、聖ダンスタンの白い粉末を少量、グラス一杯分の甘いワインに溶かし、ある貴族の癩癰を三日で治してみせたことがあった。てきめん、また懷が存分に暖かくなって、ラスキ侯のところまで行くことができた。私たちはこのラスキ侯に大歓迎され、金に糸目をつけぬもてなしを受けた。およそ一年、ケリーはそこでがつがつ貪り、丸々と肥った。ケリーは霊の声色を使って、自惚れの強いこのポーランド人に、ヨーロッパの王国という王国はお前のものさ、と約束してみせるだけでは収まりそうになかったので、とうとう私がそんな空言をやめさせ、ブラハへ出かけるようせきたてねばならない始末だった。——そういうわけで、私たちが——いや、ケリーが言うべきか——くすねたものを、ケリーがほとんど使い果たしてしまおうと、クラカウからブラハへと向かった。ハープスブルク家の宗主たるルードルフ宛ての推薦状までつけ、ブラハへ行くようにとエリザベス女王から再三手紙が届いていたこともあって、その気になったのだ。——私は今ブラハで、妻子とケリーともども、陛下の侍医である博学のタデーウス・ハーイエク博士の、旧市街リング沿いにある立派な家に住んでいる。要するに今日は、私にとって初めてのとても大事な拝謁日だ。鍊金術方士たちのなかにあって王者たる人、王たちのなかにあって鍊金術方士たる人、恐れられ、憎まれ、そして讃美されている謎深い人物、ルードル

フ皇帝謁見の日なのだ！ 私の横には、頼りがいのあるエドワード・ケリーがいる。ケリーは、一年前、ポ
ーランド人のラスキの別荘へ行ったときと同じように、まるで宴席に招かれて出かけるとでもいうように、
仔馬をバカバカ歩かせる。——だが私は、いささか雲行きが怪しい予感がして、気が重い。折しも、絢爛た
る城の正面の上を流れ行く黒い雲の影を見て、ルードルフ皇帝の暗い性格がちらつき、怯えてしまう。——
橋を渡り終え、陰気な櫓門の、のみつくさんばかりにぱっくりあいた通路を通ると、私たちの乗った馬の蹄
の音が轟く。城壁に隔絶されたともいうように、陽気な人々が日常の営みに励む明るい世界があるのは、
はるか後方だ。なんの感興も催さぬ静かな路地がのぼりになっていて、その両側には、恐怖に打ちひしがれ、
縮こまったような家々が、はりついたように上のほうまで立ち並んでいる。黒々とした宮殿の建物は、フラ
チャニ城にまとりつく人を近づけぬ秘密の門番のように、道にせり出している。——やがて堂々とした城
の馬車道が大きく開く。ルードルフ皇帝お抱えの大胆な建築師たちが山を爆破し、狭い森の谷を切り開いた
ものだ。私たちの前方、はるか高いところに、修道院の昂然とした構えの塔がそびえている。「ストラホフ
修道院だ！」と、私の内なる声がある。もの言わぬその石垣の奥には、生きながらにして死に追いやられ
た数多の死体が横たわっている。皇帝の目が翳ったかと思うや、そこから発した死を意味する宿命的な稲妻
に当たったのだ。そんな人間はそこで命をまっとうしたのだから、この城からあの別の細い路地を夜中に通っ
て、ドリボルカ・1に行かずにすんだだけでも幸運だと思ってい。そこへ行ったら、星の光を途中で見た

・1ードリボル・フォン・コゾエディなるボヘミアの騎士が、一四九八年に農民暴動を煽動したことで、
最初に投獄されたところから、この騎士の名をとって一七二〇年まで市牢として使われた牢塔。
フラチャニ城の北東の端に位置し、数々の逸話が語り伝えられている。

のが、この世の見納めだったろう。——皇帝に仕える者たちの家屋が、二重三重に上へ上へと、燕の巢の如く岩にくっついて立っている。どれもこれも下の家の屋根を足がかりにして、とでもいうふうにな。ハーブスブルク家の人間は、どんなに高くつこうが、ドイツ人の護衛兵にぎしりとり巻かれていないと気がすまないのだ。下のモルダウ川一帯で波風を立てがちな異民族の動きが信用ならないのだ。フラチャニ城は、一戦に備えて武者震いしているかのように、町を一望できるところに陣どっている。この上の櫓門の通路という通路からは、いつでも出陣用意の整った馬具や武器が、ガチャガチャ不気味な音をたてている。私たちはゆっくり山の上へと進む。頭上の小さな窓から、何者だと怪しむ視線がこちらをつけまわしているのを絶えず感じる。不意に進み出た衛兵に誰何^{すいか}されたのは、これでもう三度目だ。皇帝の謁見許可状が、そのたびにしつこく調べられる。——私たちは正面に通じる見事な渡り坂^{ジャンプ}のほうに向かう。はるか眼下には、どこまでも拡がるブラハの町が望める。——私が囚われ者になっていて、外の自由な世界を眺めているといった趣きだ。この上にいたら、目に見えぬ手に絞めつけられているような気になる。この上の山頂こそ監獄なのだ！——銀色の霧が眼下の町の上にかかっている。頭上の太陽が深い霧のヴェールからきらきら輝く。そのとき突然、光が拡散し出した灰青色の空に、銀色の閃光が走る。鳩の群れが旋回して静かな空にきらりと映り、タイン教会の後ろに消えたのだ。——もの音ひとつせず——現実とも思われない。——だが、ブラハの空に舞う鳩を見て、これは幸先がいいと思う。すぐ下のニコラス大寺院の高い円天井の建物から時鐘が告げられ、朝の十時であることがわかる。私たちの前にある城壁のどこから時計らしき音も、力強く早鐘のように同じ時をくり返しては、さあいよいよだぞ、と叱咤しているようだ。時計マニアの君主は、秒刻みできちんと時間を守ることに慣れている。君主の前に進み出るのに、時間に遅れようものなら大変だ。